

## バーナード先生のこと

山本一清

私が、一九二二年、文部省から留学の命令を受けたとき、「ヤーキスへ行こう」と決心した動機の一つは、確かにバーナード先生に会いたいと思ったからでした。バーナードの名は天文好きな者には誰でも馴染の名です。「バーナードの発見」、「バーナードの観測」こうしたことは、ずいぶん以前から引き続いて、当時もなお行われていることを世界中の天文家は、みな知っていました。私は若い時、木星第五衛星の発見されたことや、多くの彗星が彼の名で発見されたことを、書物で読んだのを思つて見ると、バーナードという名前は、ケプラーや、ニュートンや、ブラッドレイや、ハーシェル等の名と同じくクラシクな名であるように響きました。「ヤーキスへ行けば、バーナードに会える」この心が私をウィリアムス・ベイ〔Williams Bay, ウィスコンシン州〕へ引きつけました。

一九二二年一〇月二二日は私が始めてバーナード先生と手を握り合つた日でした。この日の夕暮、ベイの駅でフロスト台長に迎えられ、すぐ自動車で、宿ときめられたバンビースブルック教授の宅に案内され、そして食後同教授の案内で、天文台へ顔を出しました。その時空は曇りで、誰も観測をしていませんでしたから、フロスト、リー、ストルーフェの諸氏はみな図書室へきて、私と初対面の挨拶をしました。挨拶がしきり済んで、一寸出たらめの話が人々の口から出始めましたが、私は何だかなお一つ物足りない感じでした。

すると奥まった室から一人の大きな白髪の老翁が、一くせある歩き方をしながら、私共の話し合っている室にやってきましたので、フロスト台長は、すぐ「バーナード教授を紹介します」。「ミスター・ヤマモト」ですと紹介してくられたので、思わず私は「ハッ」としましたが、早速、手を握り合いました。

バーナードの肖像は、今までに、天文の書物などで二三度見たことはありますが、この夕、御目にかかった印象は、少々予想を裏切っていました。実際観測上には今なお非常に活躍してられる先生のことであるから、たとえ、年はとっておられても、元氣は大丈夫だろうと思っていましたのに、始めて見た時は「何となく弱々しい老爺だ」という感じでした。

始めは、先生は無口でした。フロスト台長とリーとが一番のおしゃべりで、いろいろと日本のことなどを私にききました。ところがしばらくして、ふと話の糸口ができたのに調子づいたバーナード先生は、急に様々な話題をならべられました。その夕のことは詳しくは覚えていませんが、一戸直蔵氏のことや、山崎正光氏のことや「東京天文台には一五センチの写真玉をもっていますね」といったようなことを話されたのは確かです。（その時、私を東京からきた者と思つて居られたようでした）バーナード先生に御目にかかつて「物足りない」心地は去つてしまいました。

翌日からは、毎日、戸外でか、天文台の廊下でか、私はバーナード先生を見ない日はありませんでした。まだ二、三日の間は、万事不案内でもあり、特別な用事もないので、先生の室を訪ずねるようなことはありませんでしたけれど、「グッド・モーニング」や「ハウ・アー・ユー」などをいいかわしている中に、だんだんと親しみを増してきました。

アメリカ人に似合わずバーナード先生は顔面の表情に乏しい人でした。それで、ただ見ていると、不愛嬌な顔付きのようではありましたが、その代り、手振り足ぶりが、なかなか巧みに顔面表情の代理をつとめていました。毎朝の「グッド・モーニング」にしても、その他の挨拶にしても、常に口と一しよに、片手をひよいとあげて、子供のような無邪気な挨拶ぶりをせられました。——声はいつの時でも、余り大声でありませんでしたけれど。

もの静かな、しかし全く無邪気な、小児のような心の持ち主で、（自分には子がなかった代りに）、すべての人を息子や娘のように、愛せずにはおられないような、柔らかな人でした。先生の目から見れば、会う人すべてが親しいのであったらしいです。

アメリカでは、自動車に乗せて野外を案内するのが客をもてなすのに、最も気のきいた方法となつています。ヤーキスの人々の中で、最も早く私を自動車に乗せてジュネーブ湖岸「Lake Geneva, ウィスコンシン州」のフォンタナあたりまで連れて行って下さったのはバーナード先生で、それは十月十九日でした。

また、アメリカでは、近所に新しく引越してきた人があれば、その新来者が、隣り近所へ挨拶にまわるのではなく、却<sup>かえ</sup>つて、隣人の方から、新来者を訪問して歓迎の意を表するのが最もいいねいな習慣になっています。私共がベイ村に着いて第一日曜の午後、誰よりも真<sup>ま</sup>先<sup>ま</sup>きに訪<sup>ま</sup>ねてきて下さったのはバーナード先生でした。

その答礼に、私共夫婦はある日曜の午後、バーナード先生の御宅を訪ねました。あたかもその時、先生の姪のミス・カルバートは不在でしたが、先生は私共の訪問を非常に喜ばれ、気の毒のような弱々しい身体を働かせて椅子をすすめ、炉の火をもやし、サイダーをすすめ、絵本や写真を見せ、日本のものを見せ、蓄音器をきかせ、それはそれは御自身で目のまわるような接待ぶりです。こちらは全く恐縮しました。それに断えず新しい話題をもち出され、私共は「もう御暇おひとま申して帰って行きたい」と思つて、もじもじしながら、一瞬の隙もない応接ぶりに、とうとう一時間余りも長居をしました。私が、ふと「黒ん坊の歌が面白い」と口走つたのをきいて、書架から二三冊の黒ん坊の歌の書物を出してきて、「ぜひ、もって行つて、御読みなさい。すんだらまた別のを上げましょう」といつて貸して下さつたのでした。——この日から、私は全く先生を、「おじいさん!!」と呼んで、毎日その膝に抱かれていたような気になりました。

昼の間のバーナード先生と、夜のバーナード先生とは全く別人のようです。昼の間は、いかにも、老い衰えた身体を、危くその研究室に運んで、あえぎあえぎ、ペンをもつという有様のようです。ところが、日が暮れて、空に星が輝き始めると、先生は、かいがいしく観測服を着け、厚い防寒外套を着込み、丈夫な鳥打帽で頭をはちまきし、足には重い防寒長靴をはき、あたかも若者が戦場に出かけるような武装姿で望遠鏡室に入つて行かれます。途中に誰かがうろ、うろして邪魔でもするならば蹴飛ばして行きそうな気配です。

星が見えれば、先生は元気なのです。先生は全く星の友達です。その無二の友達である星が見えないから、

昼の間は弱つていられます。夜になれば勇氣百倍とられます。まるで、うそのような変わり方です。それでも夜の空が曇つて星が見えないとなれば、先生はそれはそれはみじめなものです。自分の室に腰を下して、力なく机によりかかり、不熱心に本を読んでいられます。そして二十分に一度ぐらゐは戸外に出て、雲が晴れないかを見られます。曇りが三日も続くときは、先生は昼でも溜息をついて、うんうんとうなられます。隣室の連中は「バーナード先生がうめいて、いる」といつてひやかしますが、先生は相変らずです。こういうふうには、先生は全く本能的に星が好きなのです。ですから、都合よく空が晴れてさえいければ、望遠鏡室における先生の愉快さは如何なものかを想像して下さい。

先生の挨拶は誰に向つても、朝夕の区別なく

「グッド・イヴニング」

という夜の挨拶でした。これなどは、先生がねてもさめても星のことばかり考えていられた面白い証拠です。先生にはこの世界に昼がなくて、いつまでもいつまでも、夜の世界であつたらよかつたのでしよう。

先生が観測帳に書きつけられる文字は有名なものでした。「エエ、うるさい」といったふうのなぐり書きで、一行一行も決して揃つてありません。そしてページの終りに近づく程、文字は大きくなり、乱暴になるのです。翌朝、これが、先生御自身にも読めないのです、ミス・カルヴァートが、いつもこの難文字の読み役でした。

バーナード先生は、週に二回、百センチの大望遠鏡を用いて星の測微観測をされるのが例でしたが、私は

ある夜この種の観測をやっている先生を観測ぶりを見に行つたことがあります。すると、先生は、暗黒な室の中で、まるで相撲でもとっているような息づかいをしながら、何時<sup>いつ</sup>までも休まないで、測微ネズをねじっていられるのです。

百センチの順番でない夜は、ブルース写真望遠鏡室で銀河の長時間撮影をされるのです。これも（人の知る通り）ずいぶん退屈な仕事ですが、先生は一向御かまいなく、大きな声で歌など歌いながら、終夜、望遠鏡を繰っていられます。

ベイは暑さも寒さも非常にひどい所です。殊<sup>とと</sup>に冬二月三月頃の寒さは、華氏〇度〔摂氏約零下八度〕以下十度〔摂氏約零下二三度〕ぐらいに下ることも珍らしくはないのですが、先生は一向平気で、晴れてさえいれば観測は止められませんでした。

先生は天文家としての生涯も長く、前後四十年にわたり、あらゆる種類の観測をせられました。実に先生の多方面な観測は学界の一名物でありました。試みに米国の人名辞典を見ますと、先生のページに

観測的および写真的天文学。星団、視差、星団変〔光〕星、彗星、暗黒星霧〔星雲〕、極光、銀河、対日照、衛星、遊星、小遊星

という専門事項が書いてあります。実に天文学全般にわたるといつてよろしい。ある人が「バーナードは太陽の外は何でも観測した」といいました。なるほど、太陽の観測だけは先生が手を付けなかったといえましよう。しかし、それでも日蝕観測には三、四回も遠征してられ、コロナの写真を撮られたことはあります。また、平常の太陽とても、先生は全く興味をもたれなかったのではなく、例えば、時々、百センチのドームに

入つて他の人々が分光太陽写真を撮っているのを見られることはありません。

先生は勿論もちろんキリスト教を信じていられました。教会や日曜学校に度々たびたび寄附金をしてもらいました。しかし、毎日曜の礼拝式には余り出席せられなかったようです。そして、日曜でも午前中は天文台の自己の研究室で研究をしてもらいました。これは米国人としては珍しいことです。しかし、星とその研究のみが大好きな先生としては、決して、これは無理なことではなかったのでしょうか。

バーナード先生は美しい草花を見て楽しめるのが、唯一の娯楽でした。それで、先生はお宅の周囲の庭園にいつも赤や白の花が咲いていて、御主人ばかりでなく、よその人々をも喜ばせました。

また、先生は音楽が好きでした。御自身では楽器をプレーせられませんでしたけれど、お宅には立派な蓄音機を備え、すぐれたレコードを数多くもっておられて、宅に独りおられるときなど、これをならして、楽しんでいられました。

先生は、日頃、「アジア」という雑誌と、「南カリフォルニア」という雑誌とを愛読してもらいました。先生がカリフォルニアを愛せられたのは、若い頃をリック天文台で過ごされたことによるのでしょうか。東洋に興味をもたれた理由は私は知りません。日本へは、一九〇一年、スマトラの日蝕観測からの帰りに、長崎に立ち寄られたことがあるばかりで、余り精しいことは知られませんでした。一戸氏から少しは日本の事情を聞かれたらしいのです。

現代の天文学者の中で、パーナード先生は、何といつても変り者でした。第一、理屈に走らないで、実地観測を主としてやられたこと。第二、学者臭がなくて、一見、素人のような気分をもつていられたこと。この二つは殊ことに著しいものでした。これ要するに、初め天文家としての立身が正当の順序で学校教育を受けられたのでなく、ただ「星を観るのが好き」という単純な性質からきたのであるによるのです。従つて、先生の観測はみな、即興的であつて、決して学究的な秩序や組織があつてのことではありません。最後まで、「ただ、星を眺めていたい」という無邪氣一天張りで、その天文家としての生涯を終始されたのです。

故にその臨終は、殊ことにいじらしいものでした。先生は一九二二年十二月中旬までは、例の通り活発に観測をつづけて居られましたが、年末の二十七日頃になつて、急に床につかれました。——今から思い出せば、二十五日のクリスマススの祝い日に、恒例によつて天文台の者は、みな家族揃つてフロスト台長宅に集り「メリー・クリスマス!!」の挨拶を交換し、楽しい贈り物の贈答をしました。その時、パーナード先生もその席に見えていました。先生は入口に近い隅の椅子に腰をかけて、つまらなそう、顔付きをして、他の人々の打ち興じているのを見ていられましたが、先生の顔の表情は、前にも述べた如く、何れかといえ、不活発なので、その日、私は別に何とも思いませんでしたが、やはり今にして思えば、既に元気が平生の如くではなかつたのかも知れません。

私はその年末の二十五日から三十一日まで、東部へ旅行をしました。そして帰村した夜、パーナード先生



が病気で床についていられると聞いて、少なからず驚きました。百センチ望遠鏡のプログラムが変更されたのを見ると台長始め、多くの人々は先生の病気が軽いものではないと思ったのでしよう。それだけに私は驚きました。

先生の病気がきいて、自身のことのように、みなは心配しました。そして全快を祈ったのですが、折柄、厳寒の候ではあり、病勢はかばかしくありませんでした。ミス・カルバードに幾度きいても、「相変らずです」という返事で、誰もみな、暗い心にならざるを得ませんでした。

病床にあっても、バーナード先生自身は、回復するものと覚悟して、決して失望していられたようではありません。そして、少し気分のよい晩などは、病室の窓を開いて、ガラス越しに星の光を眺めて、自らを慰めていられたようです。一月十三日の早朝、金星が月に掩われる現象〔月齡二六日、潜入五時一七分頃、出現六時一五分頃（地方時）〕が、ベイから見えましたが、その時など、先生は寝ていながら枕元の時計で、この珍らしい現象を観測し、なお、ミス・カルバードを呼び起して、見せたりせられたそうです。

一月の下旬に私が病床を見舞った頃は、病勢が大いに進んで、一見した私も大変に失望しました。私の顔を見て、先生はしつかり私の手を握りしめ、「大いに弱りました」と、いつになく悲観したことをいわれましたが、私は胸一ぱいで、返事の言葉を知りませんでした。——これが私には最終の挨拶となったのでした。

一月の末、勢大いに非と知れました時、フロスト台長は、いよいよ決心して、病床を見舞い、遺言を聞くこととせられました。その時バーナード先生は大いに不満足で、「遺言などはない」といわれたそうです。実は

この時でさえも、先生は全快して、観測する日のきたらんことを望んでいられたのですから、遺言など促がされるのは、不本意であつたのでしよう。

二月に入つて、先生の病勢は急転急下でした。ミス・カルバートの手一つだけでは看護が不充分といふので、看護婦が増員され、また、医者もシカゴから代り代りにやつてきました。二月五日の夜はリー氏が先生の枕元に付添つていられましたが、翌朝になつて、医者が全く匙さしを投げて、歸つて行きましたので、皆々今更の如く驚愕しました。その日は空も泣くような曇り空でした。天文台の人々は、それぞれ、自分の室にはいます。が、今や大木が目前に倒れんとするのを予想して、誰も落ち付いた研究はできませんでした。台長は天文台とバーナード先生の宅との間を、杖に頼りながら、幾度も幾度も往復して、何事か深く考えつづけていました。その夜は、天文台の空気は一層重くありました。空は曇りで、観測は誰もせず、それにオフィスの人々や、村の二、三の人々も詰めかけてきていました。私もその時は、研究室の机にもたれたまま、いろんな空想にふけつてゐるより仕方がありませんでした。今夜はバンビー教授が先生の枕元にいられました。

午後八時半頃、一団の人々が、ザワザワと乱れ足で、バーナード先生の宅の方から天文台に入つてきました。そして、オフィスにいるリー夫人の所へ入つて行きました。そして、間もなく、天文台の掲示板には

「昇天」(Ad Astra)

という黒枠の掲示が張り出されました。

それから、牧師がくる。電報が飛ぶ。夜更けるまで、天文台は人騒がしくありました。

フロスト台長が世界中の天文学者に送った通知状は左の通りのものでした。

拝啓、

残念にも、バーナード教授が昨夜八時死去せられたことを御報らせ致します。教授の病状は急に悪くなりまして、重要な機能が多く働かなくなっていました。一週間以前までは、医師等は望みをもっていまして、病院へ連れて行って、専門の手術をするはずでありましたのに、ついに、心臓の故障のためこれが不可能になりました。

葬式は今日当天文台の円堂ロンドンで行われ、遺骸は木曜日ナツシュビルで埋葬されます。

教授は真理の探求に献身する驚くべき模範をわれわれに示しました。われわれ、御同様に、教授をよく知る者は、教授の知能や情緒の偉大さの記憶を永遠にもつていたいと思います。

ヤーキス天文台 E・B・フロスト（署名）

一九三三年二月七日

殿

葬式は七日の午後二時、天文台の中央円堂で行われました。急であつたので、距たった所からは誰も会葬者はきませんでした。ただ、マジソンやシカゴから、生前先生と親しい天文家が数人駆けつけたというだけで、そのほかは、みなウィリアムス・ベイ村の人々ばかりでした。これらの人々は、みな平生からバーナード先生に愛せられ、または、仲好しの友であつた人々です。こうした人々に囲まれて、ごく飾り気のない葬儀が営まれたのは、却かえつて先生の霊を喜ばせたかも知れません。こんな気分の式で、何一つ固くるしい儀式

はなく、ただ牧師の祈りと簡単な説教があり、フロスト台長の弔詞演説がありましただけです。しかし、牧師もフロスト氏も、共に先生の生前の学術的功績や生涯の履歴めいたことはいわれませんでした。大いこのことは、村の人々も皆知っています。また、そんなことを述べるのは、式の空気を却かえつて殺風景にしてみえます。それよりも、なつかしい、あの、村のおじいさんが死んだ。親切な人なつこい、柔和な、あのおじいさんが。"といったふうの気分がこの日この偉人を野辺送りするには最もふさわしいのでした。司会者はこれをよく知っていました。リーとエッツェンと、ミス・ランニングの三人が合唱で生前の先生の好きであった歌を歌いました。もちろん、大いした歌い手ではないのですが、それよりも、この人々がまた天文台の内輪の人であるということが嬉しいことでした。こうして、生前は、世界の人類のチャンピオンとして宇宙構造の発見をしたこの偉人も、最後には、やはり、その人一人にたち帰り、日頃愛せられた隣人たちのみに見送られて、死んでいってしまいました。"星を見たい"という、燃えるような執着の熱情を抱いたままです。

先生の遺骸をベイの停車場に見送って宅へ帰ってくる自動車の中で、サリバン夫人が言われるには

“ミスター・バーナードが死なれて、私は人一倍の淋しみを覚えます。思えばこの天文台にミスター・バーナードと私共とが暮したのは二十年も長い間でした。私は主人と一緒に、始めてこの天文台に雇われて来たときのことを思い出します。ミスター・バーナードは人々の中で一ばん親切に新来者を世話してくれました。主人のサリバンが始めて百センチのドームの助手として働いたその晩は、ミスター・バーナードの観測番だったと主人は言っていました。私共は皆さん御承知の通り、いま小さい新しい家を建てています。もう数週間の中にでき上ります。家ができ上ったら、私共はミスター・バーナードを第一番に招いて、その新しい食堂

で御馳走しようと思つていたのに。”

同じ車の中で、この話をきいていた者はみな、夫人のこの心に充分に同情しました。

バーナード先生に教えを乞うために、はるばる日本からやつてきた私は、ついに先生の野辺送りをしにきたことになつたのでした。しかし先生の生前、それは短かい日数でしたけれど、私は先生と、一つ天文台で起居を共にし、日夜、愛せられたことを無上の光榮に思います。先生が死なれたことも、また思い換えて、私が日本からわざわざくるのを待っていて下さつたのだと考えて見れば、私がその先生の葬式に列することができたのは、特別な光榮であつたとも思われます。——死なれて後、先生の愛用せられたブルース機は、他人ならず、この私に使用することを許されたのは、これこそは“深い縁があればこそ”と思わざるを得ませんでした。その年の夏、ヤーキスを立つた私は、リック天文台を訪れ、その後、また、ウイルソン山を訪れました。そのリックでも、ウイルソン山でも、バーナード先生はかつて偉大なる天体研究をせられたのであり、現に先生のかたみともいふべきものが、両天文台に残っているのを親しく見ました。私の心にはバーナード先生が何時までも付き添つていて下さるように思われます。

(一九二三年八月二九日パサデナ市にて)

- 『四十八人の天文家』（一九五九年六月号、恒星社厚生閣）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- カタカナ書きの人名・地名については、通行の表記にあらためた。
- 「」は編者の註である。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2 $\epsilon$</sub> でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。